

生命科学をめぐるメディア論的考察

—バイオアートを事例として

増田展大 (立命館大学)

生命と物質という古典的な二元論に対して、現在のバイオテクノロジーの展開は、情報技術やグローバル化と歩調を合わせ、新たな局面を提示している。組織培養から遺伝子工学にいたるまで、その内実をわたしたちに体現してみせる実践のひとつが、バイオアートと呼ばれる実験的な取り組みであるだろう。それらの試みはさしあたり、特定の技術をもちいて生命やその一部である生体組織に変化を引き起こし、そのプロセスや新たな特性を可視化するような実践として理解することができる。

生命や生物から派生して「アニミズム」や「ヴァイタリズム」といったテーマを掲げる展覧会や関連書が相次いで発表され、そのなかでは人間を含めた動植物の生体組織が、操作可能な対象として物質化されている様子を目の当たりにすることも難しくはない。著名なものであれば、みずからの身体をメディアとして改変するステラークやオルランらの実践があり、またバイオテクノロジーの政治的かつ倫理的な問題提起を先駆的に示した **Critical Art Ensemble**、さらに遺伝子工学を制作実践に取り込むエンドワルド・カツツの活動など、バイオテクノロジーを基盤としたアートの実践はますます活性化している。

では、こうした実践を、これまでのアートとの関係においてどのように歴史化することができるのだろうか。従来にはなかったようにも思われるバイオアートの試みに対して、理論的言説はどのようなかたちで応じ、ともに展開することができるのだろうか。本発表ではこれらの問いに対する手掛かりを探るため、とりわけメディア論の動向を参照することによって考察を試みたい。

バイオテクノロジーとメディア(論)とは、本来的に相性の良い組み合わせであったと言えるかもしれない。歴史的にみれば、生物学や遺伝学の実践は顕微鏡をはじめとする光学ないしは電子技術をもちいて展開してきたし、それらの成果はおおくの場合、写真やアニメーション、CGなどの映像技術によって可視化されることにもなる。このとき、「メディア」という概念は、媒体であると同時に培地でもあるという、二重の意味を帯びることになるだろう。

このような理解から出発することで、生命科学とアートとの相互交渉を試みることはできないのだろうか。そのために本発表が参照するのは、2000年代以降に生命や生物を鍵概念として展開するメディア論の研究である。たとえば、R・ミッチェルは「メディウム」という言葉が19世紀の生物学における「環境 milieu」概念と地続きのものであったことを指摘しており、またS・ケンバーとJ・ジリンスカは、メディアの「生命性」を強調するかたちで、それが引き起こす動態的な媒介作用についての考察を展開する。本発表ではこれらメディア論の成果を、実際にバイオアートの実践と照らし合わせることで検討をくわえてみたい。